

ラブ・トライアングル

紙島 創

1

北朝鮮への帰国者を運ぶ客船は、暗闇の日本海で巨大な船体を西に向けた。大海原を吹きすさぶ風は凍るように甲板をたたき続けている。

もうすぐウオンサンに着くんだろう。船が西向きの航路をとり始めたことから、晴彦は直感した。新潟港を出て、もう四日経っている。佐渡島沖で、低気圧の接近を避けるため、船はごく音とともに錨（いかり）をおろした。まる二日が浪費され、それを除くと新潟から半島の東にある港町ウオンサンまでは大体二日の航路である。晴彦は運動不足の身体をほぐそうと、船内を巡っていた。キムチの臭いがあたりに漂っている。鍵のかかった大部屋を窓からのぞきこむと、布をかけてある大きな物体が詰め込まれている。日本から持ち出した大型の家具類らしい。北朝鮮王朝への貢物だろう。となりでは革命映画の上映会が行われ、セピア色の画面にキム・イルソンの現地指導を報じる映像が流れていた。

*

ニューヨーク、マンハッタン。林立する摩天楼の谷間をイエロー・キャブが走り回っている。何処からか、パトカーのサイレンが接近して来る。

典子はサンドウィッチやソフトドリンクの瓶を詰め込んだ茶色の袋を両腕で抱えて、南米のグループの演奏が流れるミッドタウンの通りをホテルへと急いでいた。果たして北朝鮮の船から電話がかかるのかしら。一応約束した時間が迫っていた。

ホテルの部屋で典子は晴彦からの入電を待った。半時間ほど経って、オペレーターからコレクトコール受諾の可否をたずねる電話が入った。典子は受諾し、電話口から晴彦の声がはつきりと耳に飛び込んできた。

「元気か？」

「よくかったわね。絶対ムリだと思っていたわ」

「おれも半分あきらめていたよ。そちらは今昼間かい？」

「夕方の四時半を回ったところ」

「もうすぐ半島に上陸する。予定は二週間で、ほとんどピョンヤンで過ごすけど、最後に行ければ、」

ケソンから板門店まで足を運ぶ。いずれにしても、四月十五日のキム・イルソンの誕生日を取材して、十八日にはペキンに飛んで、アメリカに向かうつもりだ。二十日の夜には会えるかな」

「了解。じゃあウエリントンホテルで待ってるわ」

典子はバスルームに入り、頭からシャワーの湯をかぶった。長い髪から湯が滝のように身体に降りそそいだ。下腹部をシャワーで刺激した。前回晴彦と交わった時の快感がよみがえって来た。

*

典子はホテルの部屋でラジオに耳を傾けていた。ザ・キングストン・トリオが歌う「花はどこへ行った」。二回りほど前の世代が懐かしいと思うであろう反戦フォークの代表曲がニューヨークの局では今も流れている。

典子は大阪で万国博が開かれた年に生まれた。ベトナム戦争でアメリカが撤退した頃は、小学校に上がる少し前の時代である。大阪の大学を卒業して、地元の放送局に勤めた。今は報道畑にいる。晴彦は典子より十五歳年上で、万博の年には中学三年生だった。典子と同じ大学を卒業してから、アメリカに一年ほど遊学して、カリフォルニアの現地採用で通信社に入社し、長くアメリカ各地の支局を回っていたが、今は大阪の社会部に在籍している。

二人が知り合ったのは、大阪府庁の記者クラブだった。新米記者の典子が府庁のベテラン記者だった晴彦を差し置いて、ある記者会見を勝手に設定したことから、晴彦の逆鱗に触れ、記者クラブの出入りを差し止められた。中堅の記者が仲裁に入り、典子の禁は解かれたが、その後しばらく晴彦は典子と口も聞かなかった。

そのうち、十五も年下の若い女と、いつまでも険悪な状態では詮ないと、晴彦が折れて、ある夜典子を食事に誘った。

典子は最初ためらったが、この機会を逃せば事態はさらに長引くと判断し、晴彦の案内でミナミの居酒屋に出かけた。居酒屋は大阪・ミナミの宗右衛門町にあり、晴彦のなじみの店だった。

のれんをくぐった二人は奥のテーブルに腰を下ろした。晴彦が酒を注文し、典子は生ビールを頼んだ。晴彦の徳利と二つの猪口が運ばれて来た。典子は徳利を手に取り、晴彦の猪口に注ぐようにしたが、徳利の熱さに思わず手を離し、徳利がひっくり返った。

「すみません」典子は頭を下げた。お酒も満足に注げないお嬢ちゃんだね、と晴彦はのどまで出かけたが、ぐつとこらえ、微笑んだ。

「熱燗を注ぐにはコツがあるんだ。徳利の頭は熱いから、胴のほうを持ってごらん。ほら、熱くないだろ」

典子も笑みを返した。

「この店は湯豆腐がうまいんだ。典子さんも食べる？」

「いただきます」

「おねえちゃん、湯豆腐ふたつね」

晴彦の低音が店内に響いた。

「どうだい、記者クラブ、少しは慣れたかね」

晴彦が典子の顔をのぞき込んだ。典子は視線をずらせたが、はっきりと言った。

「正直まだ慣れません。何かタコ部屋といった感じで、すごく閉鎖的な感じがぬぐえません。もう少しオープンな雰囲気があればいいのにといつも思っています」

お嬢ちゃん、それはムリだよ。今度も晴彦はコトバを飲み込み、次のメニューを選んだ。飲むほどに晴彦は饒舌になった。

「一度アメリカに来いよ。おれがガイドをしてやる。アメリカはいいぞ。何でも自由で。日本みたいにこせこせしてない。日本を否定までせんけど、はるかに広大な大陸で青春のみなぐるエネルギーを発散させてみたらどうだい。協力するから」

この人はわたしに「アメリカに来い」と言う。向こうが主体なんだわ。典子は晴彦の赤ら顔を見つめた。

「機会があれば行ってみたいですね」

「そんな姿勢じゃダメだよ。もっと自分の目的とすることに自分を追い込んでいくんだ」

わたしは何もアメリカに行くことを目的とするなんて一言も言っていないわよ。早とちりのオッサンだわ。

「まあ、それぞれの人生さ。好きにすればいい。そろそろ帰るか」

典子はご馳走になり、居酒屋を出た。

今考えれば、あのアメリカ礼賛はわたしに対する晴彦さんのラブコールだったのかも知れない。陰悪な仲だったのに、初めての「デート」で事実上のラブコールをするなんて、さすが手の早い人！あの「初デート」から男女の関係になるまで二、三回のデートしかなかった。

わたしがなぜ晴彦さんに惹かれたのか。平たく言えば、あの強引さに引っ張られたのかもしれない。知らぬ間に年月が過ぎ去って行っただが、お互い身も固めずに、いまだに男女の関係を続けている。

2

晴彦は北朝鮮の仕事を終え、朝鮮民航のイリュージン機でペキンに向かった。二週間も褐色っぽい風景の中で公安に監視されながら取材を続けたせい、ペキン郊外の草原の緑が見えたとき、心が思いつき開放されていくのを感じていた。ペキン空港に着いて、自由にかっ歩するアメリカ人観光客の姿を見るにつけても、北朝鮮が如何に閉ざされた国なのかを実感した。

ペキンからニューヨーク行き便に乗り換え、その夜ニューヨークのJFK空港に降り立った。四月も下旬だったが、厚手のコートがあればと思うほど、冷え込んでいた。イエロー・キャブでマンハッタン七番街五十五丁目の角にあるウェリントンホテルに直行した。レセプション近くのロビーにある内線で典子呼び出したが、部屋にいないようだ。しばらくロビーのソファに座り、待っていたら、玄関から典子が現れた。

「おい、典子。着いたぞ」

典子の眼が輝いた。

「あら、もう着いたのね」

典子は両腕をひろげ、晴彦に抱きついた。

「まあ、ほほの冷たいこと。早く部屋で暖まりましょう」

晴彦は典子に引つ張られるようにエレベータに乗り込んだ。

部屋に入るなり、晴彦は典子の胸元を開け、二人でベッドの上に倒れ込んだ。胸元からのぞいている黒いブラジャーが晴彦を刺激した。典子のくちびるを吸い、黒のパンティをずらして、指で茂みをかき回した。セックスが終わり、二人は秘部を結合したまま、舌をからめ合っていた。

「お酒ある？」

典子の耳元で晴彦がささやいた。

「赤ワインを買って冷やしておいたわ。飲む？」

うなずいた晴彦を確認せず、典子は冷蔵庫のドアを開いて、ワインを取り出した。バーからワイングラスを二つ持って来て注ぎ、ガウン姿で乾杯した。

「あなたに桂子さんのこと話したことあったっけ？」典子がたずねた。

「いいや、誰のこと？」

「取材でお世話になっている、在日から帰化した女性なの」

「それで？」晴彦はワインのおかわりをした。

「彼女今ニューヨークに来ていて、明日わたしを訪ねてくるの」

「じゃあ、おれはどこかに出かけたほうがいいよな」

「いきなりで悪いけど。後でうんとサービスするから許して」

典子はウインクし、ガウンの胸を開けて乳房をのぞかせた。

晴彦は微笑を返した。エリート大学出の女性報道記者なんていうと、正義を振りかざして上からモノを言い、頭が固くて融通の利かないお嬢ちゃんて感じたが、典子は全然ちがう。女としての愛嬌（あいきょう）がある。おれはそこが好きなんだ。晴彦は典子のガウンを脱がせ、もう一度典子にむしゃぶりついた。

金山桂子は時間通りにウエリントンホテルにやって来た。典子は桂子を部屋まで案内したが、晴彦のことには一切触れなかった。

「広い部屋ね。景色もさすがニューヨークらしいわ」

桂子は窓からスカイスクレーパーに眼をやっていた。晴彦は、今夜は戻らない。近くの別のホテルに泊まると言って出て行った。

「桂子さん、よかつたら今夜泊まっていってくださいな」

桂子は典子の言葉に振り向いた。典子は下を向いた。

「いいのよ。ムリしなくたって。わたしはホテルがあるんだから」

「いいでしょ？」典子は桂子にせがむように言った。

「こんな独り身のオバさんのどこがいいの？」

「全部ステキです」典子の眼は真剣だった。

「そう。じゃあ今夜泊まらせてもらうわ」

桂子は上着を脱いだ。

「嬉しい！」典子は桂子に抱きついて、くちびるを吸った。

*

夜のとばりが降りて、マンハッタンの夜景が輝いていた。典子と桂子は近所の寿司バーで食事をして、部屋に戻り、交代にシャワーを浴びた。桂子は肩だけ出して、シーツをかぶり、上向きにベッドに横たわっていた。典子はバスルームを出て、タオルを身体に巻きつけ、桂子のとなりに滑り込んだ。

桂子は眼をつぶっていたが、典子の身体を引き寄せて、自分の乳房に典子の手を置いた。

「もんでちょうだいな」

典子はゆっくり桂子の乳房をもみ始めた。

「相変わらず立派なおっぱいだこと」

典子の舌が乳首をまさぐっていた。指を桂子の茂みの奥に入れて刺激していくと、桂子の興奮が増していった。

今度は典子が愛撫される番だった。桂子は首筋にキスの雨を降らし、下になった典子の胸を両腕でもんだ。顔を典子の下腹部までずらし、股を両腕で開くと、茂みに舌を入れた。典子の声が部屋に響いた。

*

「さよなら。会えてよかったわ」

一晚典子と抱き合いながら過ごした桂子は、翌朝帰って行った。典子は桂子とねんごろになった頃を思い出していた。

在日コリアンの在留資格の取材で桂子を訪ねたことがあった。マンションの居間で話を聴いている時、桂子の大学時代の話になった。桂子は典子と同じ大学の大先輩だったのだ。

「わたしが学生の頃は、いわゆる大学紛争は収まっていたの。せいぜい学生寮の運営をもっと民主化せいといった闘争はあったみたいだけど、そんなことはマスコミがちっとも注目しなかったわ。でも、紛争当時を知っている先輩が言ってたわ。機動隊がキャンパスに導入された時、激しいフランスデモを始めた活動家に向けて、機動隊が催涙弾を撃ち込んだの。そしたら芝生に寝転んでいた先輩は立ち込めたガスで眼からボロボロ涙が出たんだって。だから、催涙弾って言うのよねえ」

実際に体験していない典子には実感がわかなかった。

「その時、先輩のとなりでコーラを飲んでいた友達の言ったコトバがふるってるわ。コーラはベトナムを侵略しているアメリカ帝国主義の手先である多国籍企業の製品だけど、ボクは今人間として自然に喉が乾いているから飲んでいるんだって。コーラ一本飲むのにそんな理屈がいると思う？ わたしはなんとばかりしい言い訳だなと思ったけど、その話は紛争当時の雰囲気をよく伝えているような気がする」

「スゴイ理屈ですね。そう言わないとコーラを飲めなかったんですね、その人は」

「わたしは朝鮮籍から日本に帰化したけれど、同胞に対する差別はまだまだなくならないわ。アボジ（父）やオモニ（母）の世代やもつと前の世代に比べたら、少しはましなのかもしれないけど。日本人も変わってくれないと」

桂子は典子を見つめた。典子は返すコトバがなかった。

取材で何度も桂子と会っているうちに、典子は桂子を女性として尊敬するようになった。十五歳も年上なのに、普段はあまり年の差を感じさせないのは、彼女の精神が若いのか、人間としての幅が広いのか。典子はますます桂子の魅力に取り付かれていった。

ある晩取材が遅くなり、桂子のマンションで夕飯をいただいた時、一緒に酒を飲もうということになった。夕飯代は取材の公正を保つため折半することを約束した上で、二人は日本酒を飲んだ。飲むほどに気が大きくなった二人は、ハメをはずし始めた。桂子は上着を脱ぎ始め、ブラジャーまで取り払い、乳房を見せた。豊かな形のよい胸だった。

「まあ、立派ですねえ」典子が乳房をのぞき込んだ。

「あなたも脱ぐのよ。取材の公正さを保たんと、どうする」

「わたし、胸が小さいから恥ずかしいわ」

典子は口をとがらせながら、ブラジャーのフックをはずし、乳房を見せた。

「いい形のおっぱいじゃないの」

桂子は典子の乳房に触れた。

「公正さを保つために、さわらせてください」

今度は典子が桂子の乳房をつかんだ。

「ねえ、典子さん。一緒にお風呂に入ろう」

「風呂ですか」

「いいでしょ？ 今夜は暖まっていきなさいよ」

お風呂の沸く間、キスの仕方を研究しようと言って、くちびるを重ね合っていた。風呂が沸き、一緒に湯船につかった。

それから二人は秘密の時間を持つようになったのだった。

4

晴彦はマンハッタンをあちろちろと歩き回っていた。

数年前、通信社のニューヨーク支局に勤務し始めた頃、セントラルパークからワシントンスクエアまで歩いたことがある。ニューヨークはウォーキングを趣味にした人間集団だと先輩が話していたのを思い出したからだ。地下鉄の駅数からすれば何駅もある距離である。

歩き始めた頃、太陽は西に傾き、ハドソンリバーを染めていた。ワシントンスクエアに着く頃には、日はとつぷりと暮れた。広場横の通りに差しかかった時、暗がりから突然甲高い声が響き渡った。晴彦は、心臓が飛び出しそうになった。広場で缶けりをする黒人グループの声だった。闇夜に光る缶を追う黒人の白目だけが、暗闇を浮遊していた。

そんなことを思い出しながら歩き回り、のどが渴いたので、晴彦はアメリカ街にあるデリに入り、コーヒーを注文した。

広い店内はガランとしており、見渡すと少し奥の席にアジア系の女性が独りでコーヒーを飲んでいた。晴彦はその顔にどこか見覚えがあった。確かめようと席を立ち、近付いた。女性が晴彦を見上げた。

「桂子じゃないか！ 一体どうしてこんなところ？」

「晴ちゃんこそどうして？」

晴彦はコーヒーカップを取って、桂子の前に座った。

「北朝鮮に行ってたんだ。おとといこちらに来た」

「相変わらず在日関係の問題を追っかけているのね。指紋押捺も一応解決したし、後は日本人の国際化ね」桂子がほほ笑んだ。

「ここで何をしてるんだ？」

「アートシーンを見に来たの。今ニューヨークで何が流行っているのかをね」

「へえ、まためずらしいこともあるもんだな。確か日本では朝鮮半島との文化交流のコーディネーターをしていたよね」

「そうだけど、相変わらず日本と北朝鮮が角突き合わせているから、交流自体がとってもむずかしいの。国交のある韓国との仕事はあるんだけど、わたしはもともと朝鮮人だから、北との交流を促進したいのよね。でも、突破口がなかなか見つからなくて悩んでるのよ。だから、気分転換もかねてやって来たの。これからどうしようかって」

「女五十にしてまだ迷うか」

「仕方ないでしょ。政治が民間交流をストップさせているんだもん」

「そらそうだ」

「あなた、まだ独りなの？」 桂子が尋ねた。

「そうさ。独り身の負け惜しみを言おうか？ 独身は楽なんだ」

「こちらと同じよ。ホンネはさびしいけど」

「女がひとり、さびしいか」

「晴ちゃん、わたしのホテルに来ない？ 結構いい部屋に泊まってるの」

晴彦の脳裏に典子の顔が浮んだ。もう一晩別に泊まるか。

「よし、決めた。一宿一飯の恩義に預かることにしよう」

「そこなくっちゃ。大学時代に戻って楽しましようよ」

ホテルのロビーに着いて、トイレに行くからと桂子を待たせ、晴彦は外線から典子に電話を入れた。

「おれだ。もう一泊していいかな。ニューヨークからちょっと離れたところまで来てしまったんで、明日帰る」

「わかったわ。さびしいから、必ず明日戻って来てよ」

「約束する」

「わたし放送局めぐりで疲れちゃった。海外研修だから仕方ないけどね」

「じゃあな」 晴彦は電話を切った。

＊

桂子が泊まっているホテルはアメリカ街の五十三丁目にあった。典子のウェリントンホテルから歩いても数分の距離である。ウェリントンが地味で、小中学生の団体を受け入れる安全評価が高いホテルとすれば、桂子のほうは世界各地にホテルやリゾートを展開する大手のチェーンが経営するホテルで、海外からの観光客が宿泊する。

晴彦は桂子と手をつなぎ、エレベータを降りた。ドアをカードキーで開いて部屋に入ると、窓側から日差しが入り込み、部屋全体が浮き上がるようにまばゆかった。

「昼下がりの情事ということかな？」晴彦はふかふかのベッドに眼をやった。桂子が晴彦の背後から抱きつき、首筋にキスをした。晴彦は桂子の腕を取り、身体の向きを変えて、眼を閉じている桂子のくちびるを吸った。

二人はそのままベッドに倒れ込んだ。愛し合いながら、晴彦は、桂子の身体が学生時代に比べ、ひとまわり厚くなっているのを感じた。太ったというのではなく、全体的にバランスがとれた形がかつちりしたとても言おうか。乳房はより豊かにふくらんでいる。とても五十歳には見えない。へその下の茂みは変わらず濃い。安産型の尻の方までつながっている。

上から下まで丹念に愛撫を繰り返していく。晴彦が果てた後、二人は身体を横たえ、抱き合ったまま眠りについた。

日が西に傾き始めた頃、晴彦が眼を覚まし、桂子の乳房を吸った。

「いやよ、くすぐったい」

寝ぼけ眼のまま、桂子は少女のような声を発した。

「学生時代からざっと三十年か。おっぱいはますます立派になったな。何人の男が楽しんだんだ？」

晴彦が意地悪く笑った。

「いやよ、そんな言い方。汚らわしいわ」

男だけじゃなく、女も楽しんだって言ってよ。桂子は典子を思い浮かべながら、心の中でべろりと舌を出していた。

「ゴメン。つい聞いてみたくなったんだ」

桂子は起き上がり、化粧台の椅子に座った。鏡に向かい、顔を正してルージュを引き始めた。

「わたしがニューヨークに來た理由がもうひとつあるの」

桂子はルージュを引く手を止めた。

「と、いうと？」

「わたしを取材で追っかけている女性が今ニューヨークに研修で來ているの。その人に会いに來たのよ」

晴彦の脳裏に典子のイメージが結ばれた。そういうと典子は「ケイコ」という女性と約束があるって言っていた。

「まさか典子じゃ……」

「典子って、晴ちゃん知っているの、彼女を？」

「ああ、おれも彼女を訪ねてニューヨークに來たんだ」

「なんたる偶然！」

「典子とはもう付き合って十三年になる。おれの今カノだ」

桂子はあつけにとられていた。気を取り直して、桂子が言った。

「わたし彼女と出来ているのよ」

「どういう意味だ。デキテルって」

「女同士の関係。平たく言えばレズよ」

「ばかばかしい。何がレズだ。いい年をして！」

「年なんか関係ないわよ。人間同士の公正な行為と考えているわ」

晴彦の頭は混乱していた。ひとつずつ関係を整理していった。桂子と典子はそれぞれおれと関係がある。典子は桂子と肉体関係がある。三人の完全な三角関係。ラブ・トライアングル。

「そうか、晴ちゃんは典子さんとそんなに長く……」

「おれも普段えらそうな顔ぶらさげて、報道の自由だ、いや社会正義だなんて叫んでいるのに、自分の彼女がバイセクシャルとわかった途端、うろたえてしまうんだ。情けないっちゃありやしないー！」

「レズは不純だなんて偏見があるからよ。晴ちゃんが今踏んでいるアメリカ合衆国の地では同性愛はとくに市民権を得ているのよ。それでもジャーナリストなの？」

「おれは古い考えから抜け出せないニッポンのオッサンだ」

「まさかこんな展開になるとは思わなかったから、お気楽に話しちゃった。それにしても、典子さんとの秘め事まで言わなくてよかったのかも。でもね、晴ちゃんが典子さんの大切な人だとわかって、典子さんはわたしにとっても特別な人だと主張したかったの。お願い、典子さんを悪く思わないでね」

晴彦は典子にどんな態度をとればいいのか、思索にくれていた。

5

晴彦がウェリントンに戻った時、典子は部屋に居た。

「お帰りなさい」

言いよの無い居心地の悪さをこらえながら、晴彦はソファに座り、典子を見つめていた。

「どうしたの。ご機嫌悪い？」

「典子の客人のケイコさんというのは金山桂子のことだったんだな」

晴彦は典子をにらみつけた。

「あら、よくわかったわね」

「本人にマンハッタンで出くわしたよ」

「あなた桂子さんを知っているの？ 彼女は在日コリアンの中でも活動家だから、晴彦さんが知っていてもふしぎはないけど」

「彼女と特別な関係らしいな」

「何それ、どういうことかしら」

「女性同士の愛情があるってことだ」

「まあ、誰がそんなことを」

「桂子が話してくれた」

「桂子って言い方、何か彼女みたいね」

「元カノだ」

典子はあつけにとられた。

「元カノって、いつ頃の？」

「おれはあいつと大学の学部と同級生だった。そのころからだ」

「じゃあ、もちろん男女の関係があるわね」

「……」

典子は頭で関係を整理した。晴彦さんはわたしとつきあつて長い。でも、その前から桂子さんと肉体関係があった。わたしは桂子さんとレズの関係で、そのことを晴彦さんが桂子さんから直接聞いた。ラブ・トライアングルか。

「昨日帰らなかったのは、一晚桂子さんと過ごしたのね」

「そうだ。その寝物語で典子と桂子の関係を聞いた」

「どう思った？」

「そらショックだよ。元カノと今カノがレズだなんて」

「わたしというものがいながら、元カノとセックスするなんて、そちらの方が不純だわ。結婚してたら、離婚ものよ」

「おれには同性愛なんてわからない。それに典子より十五も年上のオバさんだよ、桂子は」

「年の差なんて関係ないわ。わたしとあなたも同じだけ離れているわ。でもそれは問題にしないですよ」

晴彦との間に突然大きな溝が出来てしまったように感じた。

桂子さんは何故二人だけの秘密を晴彦さんにしゃべってしまったのかしら。わたしと晴彦さんとの仲をさこうとしたのかしら。でも、そうすれば、自分も晴彦さんから遠ざかることになるんじゃないの？ あんなに信頼し、尊敬してたのに、何か裏切られたような気がする。

「わたし桂子さんに会って来ます」

桂子のホテルへと急いだ。部屋のドアをノックした。桂子がドアを開けた。

「典子さん！」

小走りに来たせいか、息が切れそうだった。典子はドアを後ろ手に閉じた。

「お水いただいていいかしら」桂子の返事を待たずに、洗面台に急ぎ、コップ一杯の水を一気に飲

み干した。

「晴ちゃんに聞いたのね。わたしたちのことを」

典子は桂子をにらみつけた。

「桂子さん、どうしてなの。何故話してしまったの」

「ごめんなさい。わたしにとつて、典子さんも晴ちゃんも、どちらも大切な人なの。だからラブ・トライアングルの三人が、お互いに愛を確かめ合っていることがわかった瞬間に、わたしたちの関係を晴ちゃんにも伝えなくちゃと思ってしまったの。許して」

「桂子さんの言うことは何処か理屈っぽい気がする。折角の関係が、もう元に戻らないような気がするわ」

典子は涙ぐんでいた。

「本当にごめんなさい」

桂子は典子を抱きしめた。

「ねえ、最後に一度だけ抱き合いましようよ。ダメ？」

桂子の眼はうるんでいた。桂子は典子の上着のボタンをひとつずつはずしていった。

6

典子はアメリカ研修を終え、大阪に戻って来た。帰国後しばらくは研修の報告書作成や旅費の精算などがあり、晴彦や桂子のことは半分忘れていたが、日常に戻るにつれ、二人はどうしているのか気にかかり始めた。

桂子さんは自分からわたしたちの秘密をバラし、密会を最後にしようなどと、わたしとの関係を進んで絶った。前から別れる機会を探っていたのではないか。一方でわたしの評判を落し、晴彦さんとの距離を置かせて、そのスキについて、元カレをゲットしようとしているのでは。そうはさせないわ。

典子と晴彦の間には、レズ発覚以来冷ややかな風が吹いていたが、典子は思い切って晴彦に電話を入れた。

「典子です。しばらくお会いしてないんで、どうされているのかと思って。何処かで食事でもしません？」

「食事は食事として、どうだい、久しぶりにホテルは」

典子は意外な感じがした。晴彦さんはわたしからの電話を待っていたのだろうか。それにしても、いきなりホテルに誘うとは。

その夜、典子は晴彦とベッドの中で肌を寄せ合っていた。

「この身体を桂子が欲しがったということか」

晴彦は典子の胸から下腹部へと指を滑らせた。典子は自分のほうが桂子より積極的だったのを黙っていた。晴彦がそう思い込んでいれば、好都合とさえ思った。晴彦が耳元でささやいた。

「おれと典子、それに桂子と、三人でセックスしてみないか」

「どういう意味なの。それは」

典子が不審げな目つきを向けた。

「ニューヨークでぼくら三人はきれいなラブ・トライアングルを作っていることがわかった。三人一緒に新しい愛の形が作れるかどうか、試して見たくなったんだ」

「わたしに隠れて、桂子さんと二人で何かたくらんでいるんじゃないでしょうね？」

「疑り深いなあ。そんなこと考えるはずはないじゃないか」

「桂子さんはどう言っているの」

「やる気満々だった。今までしたことのないことをして見たいつて。どうだい、やってみるかね」
「……」

「まあしばらく考えた上で返事をくれ。頼んだよ」

晴彦はベッドから立ち上がった。

*

典子は仕事の合間に三人セックスのことを考えた。ラブ・トライアングルの新しい愛の形なんて、CMコピーみたいなことを言っているけど、それもこれも、元はと言えば、桂子さんがわたしたち二人の秘密を暴露したことから派生したことよ。いわば、三人セックスの仕掛け人は桂子さんだわ。やる気満々が聞いてあきれるわ。自分で仕掛けておいて。

腹は立ったが、ニューヨークから帰ってから、一度も姿を見ない桂子のが気がかりだった。休日の午後、典子は電話でアポをとり、桂子の住宅兼事務所を訪ねた。事務所の中のあちこちに荷作りされたダンボールが転がっていた。

「いらっしやい。お元氣そうね。荷物だらけで落ち着かなくて申し訳ないけど、どうぞお入りになつて」

桂子は笑顔で典子を迎え入れた。

「引越しされるんですか」

典子はダンボールの山に眼をやった。

「わたし北朝鮮に帰ろうと思って」桂子が突然言った。

「北朝鮮へ帰る？」

「ええ、さあこちらにお座りになつて」

典子はリビングのソファに腰を下ろした。

「もうわたしは五十よ。孔子流に言えば、天命を知るべき年なの。この機会にもう一度原点に戻って、祖国とわたし自身を見つめ直したい。その上で、これから果たすべき役割をしつかりつかみたいの。半島の東岸にウオンサンという港町があつてね。その近くにわたしの親戚が今でも住んでいるの。最近やつと連絡がとれて、懐かしい話を色々していたら、無性に帰りたくなってね。それでようやく決心したの。でもいったん帰ったら、色んな意味で恐らくもう日本には戻って来られないと思う」

桂子さんが日本から去ってしまう。晴彦さんはそのことを知り、桂子さんが去る前に三人だけの思い出を作ろうと、とっぴな三人セックスを考えたのではないだろうか。

わたしたちの秘密が秘密でなくなった時、その真意を確かめに行ったわたしに、桂子さんが言ったことを思い出していた。

「わたしにとつて、典子さんも晴ちゃんも、どちらも大切な人なの。だからラブ・トライアングルの三人が、お互いに愛を確かめ合っていることがわかった瞬間に、わたしたちの関係を晴ちゃんにも伝えなくちゃと思つてしまったの」

典子の気持ちは決まった。三人だけの秘め事を作って、桂子さんを送り出そう。

7

典子が桂子を訪ねてから五日後の昼下がり、三人は繁華街に近いホテルの一室に居た。眼をつぶり、全裸でベッドに横たわっている桂子に、典子と晴彦が裸体を絡ませていた。

典子は桂子の乳房を愛撫し、乳首とくちびるを交互に吸っていた。これまで取材が終わった度にくちびるの中で転がしてきた桂子の乳首を吸うのも、おそらくは今日が最後になる。そう思うと乳首を引きちぎってでも手元に置いておきたいという衝動にかられてくる。ほんの一部でもいいから、手元にそっと置いて愛撫したい。桂子が一番感じるという乳首を。

桂子は自分よりも若い肉体の最後のエキスを典子の奥から吸い始めていた。典子の声が晴彦の耳にも届いてきた。

晴彦は、桂子が典子を吸い終わった後、桂子の奥に一物を入れ、桂子と歩調を合わせるように、頂上に向かって昇つていった。

桂子の脳裏には学生時代の晴彦との性交がよみがえっていた。若さに任せただけのインサートで晴彦はあつという間に果ててしまい、桂子は後に残されることが多かった。今の晴彦の一物は桂子の奥で一緒に果てるのをじっと待つていてくれる。

典子は桂子をやさしく抱きながら晴彦と眼を合わせた。晴彦がゆっくりと頷いた。典子は桂子の乳房を歯先で軽く噛んだり、舌で転がしたりしながら桂子の準備を手伝った。典子のアシストを受けて、晴彦のゴールの瞬間が来た。晴彦は桂子の言葉を待っていた。

「イクウ！ イクウ！」

桂子に火がついたとたん、晴彦が声を上げて果てた。典子はそれを見守りながら、桂子のほてった横顔に、性の究極の歓びを感じ取った。

それから一週間後。桂子が日本を発つ日が来た。典子と晴彦は空港に見送りに出かけた。

「長い間お世話になりました。桂子さんとのことは一生忘れません」

典子は涙ぐみながら桂子の手をとった。

「わたしの代わりに、晴ちゃんをよろしくね。わたし、二人を半島から見守っているから」

桂子は典子の手に、自分の手を重ねた。

「身体だけは気をつけてな。もし日本に来る機会が出来たら、おれたち待ってるぜ」

晴彦は桂子を抱きしめた。搭乗を促すアナウンスが響いた。

「ペキンまで飛んで、ピョンヤンまで乗り継いで、陸路でウォンサンよ」

「ウォンサンか。ニューヨークに行く前、おれはその港から北朝鮮に上陸したんだ」

「それじゃ行くわ。さようなら。あなたたちのことは生涯忘れません」

「桂子さん、また会えるって約束して！」典子が涙ながらに訴えた。

「ええ、是非そうなるように」

桂子は目頭を押さえ、もう一度晴彦と典子に微笑を送り、振り向かず歩き始めた。

晴彦は、桂子に典子との関係を打ち明けた時、桂子がもらした言葉を思い出していた。

「晴ちゃんとは典子さんとそんなに長く……」

去っていく桂子の後姿を眺めながら晴彦は、桂子はおれたちに気を遣い、身を引く決心をしたのではなからうかと胸の底で思った。

完